

<卒業論文小特集>島尾敏雄論

著者	小川 信弘
雑誌名	日本文学誌要
巻	27
ページ	26-38
発行年	1982-12-05
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019348

島尾敏雄論

小川 信 弘

一 築かれた△資質▽

人には、人それぞれの△資質▽が在る。それは一般には、生まれつきのものと考えられている。が、決して固定されてしまったものではあるまい。それは可變的なものと考えてみて良いのではなからうか。

△資質▽を変えるもの、或いは築いていくもの。それは、我々と外的事象との接触、つまり体験であり、体験から何を得るかという享受である。とりわけ、幼少時のそれは重要な意味を持つものと考えられる。何故ならば、幼少時の我々の生活は、新体験の連続とも言えるし、その享受においてもダイレクトなそれが許されていたからである。自身の置かれた状況や、その体験の有する社会的或いは反社会的・非社会的意味など氣にする必要もなく、絶対的な量・質を持って眼前に現われる外的事象と接触し、絶対的に享受しさえすれば良かった筈である。それが次第に成長するにつれて、我々は体

験の享受の仕方を社会に副わせる必要があることを知り出し、無意識のうちにそうした享受の仕方を選ぶようになって来る。しかし、ふと、その選択的行為に異和の感じを覚えた時、我々は選ぶ必要のなかった幼少時の体験の享受の仕方に思い至るのではなからうか。

ところで、体験の享受の仕方を左右するものは何か。一般には、体験者の性格と考えられるが、正確には、それまでの積み重ねられた体験から得られたもの。つまり、可變的な△資質▽ではなからうか。

さて、島尾敏雄の△資質▽の世界の中樞を、△関係▽の△異和▽という点にみとめたのは、吉本隆明であった。その「島尾敏雄の原像」と名づけられた中での吉本の考えに、大筋のところ私は同意するのであるが、△資質▽そのものをあまりにも先天的なものとしてとらえ過ぎている氣がしてならない。冒頭で述べたように、可變的・形成的なものとしてとらえてみるのも良いのではないか。

そこで、これから島尾敏雄の△関係▽の△異和▽という△資質▽の形成について考察してみたい。

さて、その形成に最も力を及ぼしたと思われる、幼少時の体験。それを先ずは年譜から探してみると、家は横浜で輸出絹織物商を営んでおり、経済的には恵まれていたようである。その長男として彼は生まれ、俗に言う「お坊っちゃん」的に育てられたと考えられよう。やがて、妹・弟ができるが、母の態度は次のようであつたらしい。他の三人のきょうだいたちにとって母が長男の彼にだけ明らかに特別待遇をすることが子供心に納得がいかない。三度の食物にもはっきり区別があらわれた。（『唐草』）

この「区別」に対しての、弟の不満は当然であろう。弟は時々ふくれっ面をした。お兄ちゃんばかり鼻負して。

（同前）

母の「鼻負」を受ける長男の彼は、弟に対して「人間的なと言つてみたいようなひげ目と恐怖」を感じる。その感じは、後の『鬼剝げ』の中にも示される。

ぼくは弟に対しては顔をあげていられないという気持がある。

……母親は弟よりぼくを余計可愛がり、……しかし弟はぼくより背が高く容貌も見栄えがする。……ぼくは彼の顔色に、少しでも不安そうなものを感じると、落着けない思いにかられた。

これは、彼ら兄弟がだいぶ成長してからのことであるが、幼少時に受けた母の待遇差別へ対して持たざるを得なかった感情が根強く尾を引いていることを認めねばなるまい。

それにしても何故母は、長男の彼にだけ特別な待遇をしたのか。その理由を推測することは困難なことではないが、ここではそれは問題とはなるまい。彼にも弟にも、そして母にもその責任はないの

であるから。結局、強いて責任を帰するならば、兄弟関係そのものにあるのであり、それはもう仕方のない仕組なのでもある。

しかし、その仕方のない仕組Ⅱ関係を飲み込むことができないところに、鳥尾の特質が認められるのである。それでは、何故飲み込めないのかについて、今度は母と彼との関係から探してみたい。

私がぐずぐずしていると、ウチベンケイソトミソとかウチキなどということばをつかった。よその人の前でも母はよく、この子はウチキで困ります、と言った。私はウチキということばをきくとからだがほてり、そのことばを口にする者をにくみ、ほかのこととでやさしい母がどうしてそんなことばを考えなく言うのだろうと不審に思った。（『幼い頃』37・12）

この文章から、何となく内弁慶そうな彼の姿が思い浮かびはするが、はっきりと内弁慶と断言することはできない筈である。何故ならば、彼はそう見做されていたに過ぎないからである。だから、彼自身は実際には内弁慶ではなかったのかも知れない。

しかし、そう見做されているということは、見做す側にしてみれば、そう見做すだけの根拠があつての上で見做している筈であるから、見做されていることが全く誤っているとは言いがたい。要するに、見做し、見做されという関係は満更嘘とも言えないが、絶対的な真実であるとも言えないのである。

考えてみれば、この世の人間関係は全て、そうした見做し、見做されによって持たれているとも言えよう。たとえ、どんなに親密な関係であろうと、やはり見做し、見做されの部分は多少ともあらざるを得まい。当然と言えば当然のことであり、我々は既にそのこと

に気付いた上で、多くの人間関係を維持しているとも言えよう。

だが、幼少の彼はまだそのことに気づいてはいない。気づいてはいないが、その気配を他ならぬ「ほかのことやさいい」母から感じ取り「不審」に思っているのである。つまり、彼の望んでいる関係とは、見做し・見做されという両者の間に、わずかでも違いのある関係ではなく、両者が全く同一化された関係なのである。それは、見做されているように自分を変えることもなければ、見做す側の人を見做されている自分が選ぶことでもない。二つの立場を、見做すは見做すとして、見做されるは見做されるとして、どちらに手を加えるでなしに、同一化しようとするのである。もし仮に、そのような同一化ができるとしたらば、と我々は考えがちであるが、彼にはそうするしかないのである。そのためには、彼はどうすべきか。つまり、見做し・見做されの関係に欠けていた確実な証しを探し求めるべきなのである。そして、その証しを求め得た時に、彼の望んでいた関係は、はじめて成立するのである。

しかし、見做し・見做され関係によって持たれている、この世間の人間関係の中で、それは容易には探し得まい。むしろ、探そうとすればする程、それは遠退いて行ってしまうようである。が、それでも探し続けようとする。一方では、世間の見做し・見做され関係への異和感を強めながら。

こうして述べてきたように、彼の△関係▽の△異和▽という△資質▽は、幼少時の特に自分が長男として、弟と、又母との関係を持たねばならなかったゆえに築かれ、そして、その△異和▽の解消が困難であったからこそ拡大・持続され、吉本の言うような、島尾敏

雄の△資質▽の世界の中枢となったのではあるまいか。

二 戦争体験

戦争も又、体験の一つであり、それをどう享受したかが重要である。しかし、島尾敏雄の戦争体験は、体験そのものが異常と言わざるを得ない。

島尾敏雄は、自殺艇と呼ばれた特攻隊長として、奄美群島加計呂麻島吞之浦に基地を設営して出撃を待ったが、ついに一度も出撃せずに、敗戦の日を迎えた。この体験はどう見ても異常に違いない。先ずは、特攻隊であることが。

特攻隊と聞くだけで、今日の我々の胸には憐憫の情がもよおさるよう。それは如何にも日本人らしいと言われたやり方へ、疑いを抱かぬままに死に去った（少なくとも、そう見えた）若い魂へ対する哀悼の意の表われであろうか。ところが、島尾は特攻隊ではあったものの、そういった哀悼の意を受ける必要は生じなかった。何故ならば、彼は死なずに済んだからである。特攻隊暮らししたもの、特攻はしなかったのである。が、そこに彼の違った意味での不幸があった。

つまり、特攻は死という結末を伴って始めて成立したと認められる行為であったのに、彼にはその結末が訪れなかったのである。訪れるべきであった筈のものが、訪れない。そこに、彼の体験の第二の異常さがある。

しかし、特攻行為での死は肉体的なものであり、精神的なそれは又、特攻行為そのものとは別問題であろう。肉体は生きていても、

精神が死んでいるということは考えられるからである。

ところで、一般に精神の死とは、何を指してどのように言うものか。主体的な意志を発露しなくなつて、与えられた状況を訳の分からぬままに、或いは分かつたとしても分らない素振りをする事で肯定し、成るがままに身を任せることを言うのか。私の場合は、そう考えてしまうし、それ故にデカダンの生き方の中にこそ、生の精神が宿っているとも思えるのである。結局のところ、個人とそれを取り巻く社会との関係に、どう対処するかということが、精神の死・生を分かつと思われる。

それでは、デカダンのとは言えないと思われる島尾の精神は死んでいたのか。この問いに対して、私は否と答える。確かにそれは死んでしまったように見えるかも知れないが、実のところ決して死んではいなかったのである。その証明は、彼の作品が示してくれよう。先ず最初に、特攻隊員として、死を予定されていた彼が、その頃どんな感じを抱いていたか。これを作品中から探すと、次のようである。

その頃は毎日毎日がぶつんと断ち切れていて、昔の日とも将来の日ともつながりがないように感じられてきました。それは怖ろしいことでした。どんなことにも感動しなくなってきたのです。そして思い出したように血が狂うのです。血の狂う日は心の中に雨ぐもが低く低くたれこめていました。(『島の果て』)

これは「むかし、世界中が戦争をしていた頃のお話なのですが――」で始まる、メルヘン調の作品『島の果て』からの引用であるが、そこに描かれたことはメルヘンとは程遠いことがわかる筈である。メ

ルヘンの世界では、死の中の生が考えられるべきであり、決して生の中の死は考えられまい。又「血が狂う」ような表現もメルヘンの世界には見出せまい。つまり、彼の今いる世界は決してメルヘンの世界ではない、現実の世界である。しかし、現実の世界で彼は、日が孤立した感じを受けている。本来、そこでは、生を確信している者の無意識的な「昨日・今日・明日」という日々の繋がりがあべきである。それなのに、死を確信している彼にはそれが無いという、これも又現実。その現実への当然ながらの異和。それを認めるのに感じる抵抗。だが、その抵抗が空しいものであると知る彼は、結局のところ、メルヘンの世界へと向かわざるを得なかったのである。

さて、死を確信している彼の、日々の孤立した感じ。それを「末期の眼」的にだけで了解することは出来ない。そこには、明日が無いからこそ今日に重みを見出す視点と、明日が無いなら今日も無くて同机的な視点の二つが同時に存在する。そして、死に赴く人は、この二つのうちのどちらか一方だけを選択することが出来ない。二つの視点、言い換えるならば、今日に対する二つの価値観のあることが、その人を苦しめるのである。先の引用の中の「血が狂う」はこの苦しみの表現に他ならない。

そして、その苦しみを無くすのは、結局は死である。死ぬことによるしか「低く低くたれこめて」いた「雨ぐも」を晴らすことは出来ないのである。未だ、終戦を思いつかない『島の果て』の中の彼には。

その『島の果て』から三年後に書かれた(発表は一年後)同素材を扱った『出孤島記』は、先のメルヘン調を脱し、主人公「私」の観察風になる。

私はその頃の時間の感じに自信がない。時は進んでいたのか、逆行していたのか、或いは又停止していたのか、然しそれを疑ってみたというのではない。ただ私にとって歴史の進行は停止して感じられた。私は日に日に若くなつて行つた。……私の頭の中には猛烈に無気力な空白の渦があつた。昨日は今日に続かず、そして又今日は明日に続いて行きそうもない。（『出孤島記』）

ここに引用した部分は「島の果て」からのそれと対応する。死を前にして、時間感覚を失つたことが分かるが、そのことを彼は「怖ろしいこと」（『島の果て』）と思つたから「疑つてみたというのではない」に変わつてゐる。この変化は、世間的な時の流れへの執着が切れたことを表わしている。

つまり、死というのは「歴史の進行」＝社会（世間）の動きに関わらず、最後は個人の問題なのである。ここで彼は「猛烈に無気力な空白の渦」を頭の中に定着させることで、それを処理した。つまり、死の覚悟が出来たとしてゐる。しかし、そこに不満＝生への執着があることは否めず、それが「私は日に日に若くなつて行つた」と屈折して表現されたのであろう。勿論、それを言葉通りに信じることは出来ない。彼の精神は決して死んではいなかったのであるから。

現実に戦闘がない以上、我々は異常な興奮でいつ迄続くか分らぬ毎日を過すことは出来ない。我々は普通の神経でその毎日を飲食し排泄して暮さねばならない。（『出孤島記』）

彼の言う「異常な興奮」＝死への出発を待つ興奮で、全身が覆われているにも関わらず、飲食・排泄という日常の営みからは解放され得ない。その、言わば生のための義務は、死へ向かおうとしてい

る彼には必要無いようでもあるのだが。つまり、彼はここで生と死という対極的存在である筈の存在が、実は互いに浸透しているという、妙な必然性を認識する。そして、その認識が次第に強くなつて来る。

もう自分の精神を日常のいつもの通りの何事も起らない安らかなの体制へ切り換えてもいいのではないかという気持ちがかびのようになつて来た。（『出孤島記』）

こうした緊張が解けて行くかのような過程、それは実は日常の重さに気付いて行く過程であり、その過程は『出孤島記』から十三年後に書かれた『出発は遂に訪れず』で一層明らかにされる。この十三年という、島尾の実生活上での時間の持つ意味は大きい。

日常は些細な行動の束になつてひしひしとおしよせ、なおざりにすることは許されないが、そのどの一つをとりあげても、昨夜の今朝では、余分なつけ足しとしか思えない。無意味な積み重ねのため、区切り目が醜くふくれて来て、私の死の完結が美しさを失う。しかしこちら側の生にとり残されている事実を矯め直すことはできず、よごれた日常を繰返さなければならぬ。はつきりつかまえない腹立たしさがわだかまつてゐるが、すべて自分にはね返ってくる。（『出発は遂に訪れず』）

繰り返すことになるが、精神的には一応死を覚悟してゐながらも、肉体はその瞬間が来るまで、睡眠・飲食・排泄という生の側の日常行為を要求し続ける。それが、彼の望む美しい死の完結の邪魔をする。その日常を「よごれた」と言い「腹立たしき」を感じても、否定出来ない重さがそこに在る。単に在るだけでなく「皮膚の下でうごめく生のむずがゆさがはたらきはじめて」とあるように、

それは彼の中を動き出す。しかし、どんなにそれが動き、働いたとしても、死という運命を変えられはしない。そのことを知りながらも彼は、その重さが彼の精神に宿って行くことを止められない。

でもからだの底の方にうっすら広がりだしたにぶいもやのような光の幕は何だろう。生をつめたく取りかき、かたくとぎしていた氷結のおもてに、どこからともなくゆるみがしのびこんでくる。(『出発は遂に訪れず』)

ここに至って、日常の重い存在は彼を安心させた。肉体の側から発生したそれが、精神を変えさせたのである。最初の『島の果て』では死んでしまったかのように見えていた精神は『出孤島記』では徐々にその息を吹き返そうとしており「私は誰の為に死んで行き、そして私の死んだ後には誰が生き残っているのだろう」と、自分の死に思いを巡らせ始める。そして『出発は遂に訪れず』では「この行為に従事することを納得させているものは何かが、よく分らない」と、自己の精神分析にまで至らせている。

こうした精神の掘り下げ作業こそが精神の蘇生であり、それが日常の重さの認識度の深まりと密接な関連を持っていたことは言うまでもない。そして、さらに言うならば、その「深まり」は、先に述べたところの十三年間の島尾の実生活から得られたものなのでもある。その実生活において彼は、「戦争体験」と「病妻体験」との類似性・共通性を発見したのである。先の『出発は遂に訪れず』の引用部分を病妻記の一部と考えてみても、それほど異和感を感じさせないのは、そのためでもある。

さて、精神が蘇生しても、彼の目前にある死が予定されている現

実が変わらない限り、どうすることも出来ないが、もし現実が変わったならば、という考え方が次第に出て来る。

戦争の終了。世界の情勢に盲目になってしまっていた我々にとって、そのことが、どんなに遠い殆んど望み得ない素晴らしい時間と空間、という風に考えられたことだろう。(『出孤島記』)

終戦という現実の変化も彼にとっては「殆んど望み得ない」夢であった。仮に終戦となっても「自殺艇乗組員にだけは甚しく悲劇的な顛末しかやって来ないのではないだろうか」(『出孤島記』)という予感があったからである。終戦＝戦後の生は夢とされている。

しかし『出発は遂に訪れず』では単に夢で済まないものと、それは考えられて来る。

そして生き残ったとしてもこの先に生活しなければならぬ日日の、断絶に囲まれた世の中で耐えて行けそうもない気持の底も見たと考えた。(『出発は遂に訪れず』)

世の中を「断絶に囲まれた」と見て、そこに「耐えて行けそうもない」と考えるのは、如何にも島尾の特質がよく出ている。終戦＝戦後の生は未だ夢に過ぎない現実であるのに、その夢の中にまで不安を持ち込まざるを得ない。その不安によって、夢は本来の夢でなくなる。彼にとって本当の夢とは、彼の苦手とする世間や他人との関係の待ち受けない生の世界での生である。だがそれは、飽くまでも夢であり、現実に実現することは全くといってよい程、彼には考えられない。そしてどうやら終戦という、彼が不安を持ち込まざるを得なかった夢でない夢は、その通り夢でなくなる。

八月十五日。その日の様子を『出発は遂に訪れず』から探ってみ

よう。最初は未だ夢に過ぎない訳であるが、彼には不安があるから夢が実現したとしても手放しで喜べない。

何か決定的な変化が戦局の上に現れて来たのではないか。その考えは好奇と失望とを同時に与えた。(傍点筆者)

前夜の連絡で、防備隊へと向かう途中ではこの失望が去ったかに見える。

……センソウハ、オワッタノカモシレナイ、という考えが頭に来た。……オワッタ、オワッタとむくむくした煙のようなものが胸もとにつきあげてきて、私は思わずにっこり笑ってしまい、口もとをしめようと思ってもしめられない。

状況判断からしても、終戦という夢が実現することは間違いないと考える。その後の不安は現われたが、何よりも先ず死なずに済むことの喜びが、それをも負かさうとする。夢がいよいよ実現すると人が悟った時に、実現後のことより、実現するという瞬間が大きく立ちほだかることと同じである。

そして、いよいよ夢は現実と化した。

ムジョウケンコウフク……それが今現実の重さで目の前に立ちほだかった。……見当のつかない戸惑いにぶつかった。それは少しずつ、馴染みの、未知のものへの怖気の顔付に変貌した。それはよく分らぬながら、今の戦闘態勢の中で完全にそのしくみから脱れ出るまでにどれほどこみ入った煩瑣をぐりぬけなければならぬかということへのおそれだ。

確かに死なずには済む。そのことは喜ばしい。しかし、いざ生きたとなると、話は別である。夢が夢である時はそれで良いが、今や

夢は現実と化してしまったのであるから。そして現実となった以上は「馴染みの、未知のものへの怖気」や「おそれ」も又現実化されずにはいないであろうという予感。それが彼を「戸惑い」にぶつからせる。その「戸惑い」が彼に、生の場を修羅場とも思わせ、素直に生の場へ戻ることを許そうとはしない。

その表われとも思えるのが、特攻参謀の「ただし信管は抜いて置いてほしいな」という言葉に対し、彼は隊員に「信管も挿入したままにせよ」と言うところである。それは終戦によって秩序を失いかけている軍隊組織を維持しようとする、隊長としての彼の判断である。と同時に、今後の生への不安が強い緊張感の表現でもある。

が、その夜ベッドに入ってから彼は「明日になったら何よりも先ず特攻艇の兵器から信管を外させよう」と考え直す。一体、何が彼をそうさせたのか。その間にある、夕食での前任将校の言動がか、或いは彼の部屋へやって来た前任下士官のそれがか。

「もし何ごとかを本気で決意している者なら、きっと何も言わずに黙っていてやるだろうな」

この直接には前任将校へ向かって投げられた、吐き捨てるような強烈な言葉は、彼自身へも、そして他の隊員たちへも向けられている。敗戦の悲しみと生き残れた喜び、自分は何の役にも立たなかったという嫌悪とこれから報いてやりたいという様々に入り混じった思いを皆が抱いている。が、それをどうすることも出来ない。そのみじめさが隊全体を支配してしまっている現実を彼は見た。

又、如何にも軍人らしい前任下士官までが、彼に対してのそれまでの劣等感をほらそうとでもするかのように投げつけて来る言葉に

も、彼はそれまでの軍隊の秩序が崩壊しつつある現実を見た。

少なくとも彼はそれまで、隊長として外見的には安らいでいられた。つまり、軍隊の秩序が有ったればこそ、そうしていられた。しかし今、それははかなく崩れ去ろうとしている。もうそんな秩序は必要の無い社会になったからである。否、本来そんな秩序は有り得べからざる筈であった。が、彼はその秩序によって異常な時を生きて来た。そして、たとえ今後の生に不安があろうと、その異常な時の中に戻るべきでもない決意する。その決意の表明が「信管を外させよう」という、戦力を失うことで軍隊の存在意義そのものを無くすところにあったのである。

もし刀を抜かなければならぬときは抜こうと心に言いきかせた。

終戦という夢が現実となり、夢の中での不安まで現実化すると感じて、生への不安を抱いたものの、それまでの異常さに立ち戻ってもならない。結局、生への不安を解いて生きるしかない。日常の、現実の中に。この引用は、その彼の心意気と言えるのではないか。こうした経緯は、後年書かれたエッセイに明らかにされている。

私にとって敗戦は圧倒的に特攻身分の約束の解除としてうつったのだった。秩序の崩壊が自由の顔つきをして近づいて来た。その時点ではなお多くの危険を乗り越えなければならなかったとしても、これからは思いきり自分の力がためられると思い、身内にうずうずする躍動が感じられた。それまで死のわくの中でだけ残余の生を如何に処理するかにつとめてきた私のまにに、無期延期となった死が色あせ、かかえきれぬほどの生が投げ出されたわけ

だ。何かに強いられるのではなく、自分のやり方でやって行けそうだという感受の中で、不自然なほどの希望が湧いていた。世間の習慣に合わせるものが摩擦を少なくする方法だと思ひこむあきらめに似た考え方はむしろ世間への不適合の恐れにさえなっていたが、国の破れという現実がその習慣をも破壊したかもしれないと考えることで、むしろ希望が見えてきたのだった。（『うしろ向き
の戦後』46・7）

それまでの「死のわく」は外され、今や生だけを考えれば良い。その生の不安ともなっていた「世間への不適合の恐れ」も「国の破れ」が「世間の習慣」をも破壊したと考えれば消えて、希望だけが残った。まさしく、島尾の戦後の「新生」を表わすかのようである。しかし、現実には彼の期待したような「国の破れ」は少なく、希望はしぼんで行った。

……いずれにしろあの敗戦のあとで私が実感したことは、国は破れてもなお山河は残っているという当然なことへの鮮やかなおどろきであった。だから敗戦直後の国の中で私が目にしたことはむしろ期待はずれでさえあった。……私の戦後の出発はそうようにしてなしくずしにやって来たといっている（同前）

戦後の第一歩を踏み出した頃の回想的なこのエッセイに島尾が、『うしろ向きの戦後』と名付けたことは興味深い。しかし、最初は「まえ向き」で歩もうとしていたことが『出発は遂に訪れず』から読み取れた筈である。それが、結局は「うしろ向き」にならざるを得なかった。その変転の中にこそ、彼の本当の戦争体験があったのではないだろうか。

三 恋

島尾敏雄の異常な戦争体験を考えるにあたって、後に妻となったミホとの恋愛は忘れられないことである。

そもそも二人が最初に知り合ったのは、特攻隊の慰安演芸会が開かれた時らしい。この会での様子は『闘いへの怖れ』に書かれているが、その時に彼が心を奪われたのは、小学校の女教師であったミホではなく、その生徒であろう祝桂子^{イヅミ・キズナ}にであった。彼は、夢の中に出来来るロシヤ少女ワリーヤの面影をその少女に見て「もう年齢などは何の障碍でもない」とまで考えている。その後、この作品の中では彼は祝桂子の家を訪れ、祝桂子と一緒に女教師の家へも行ったらしい。が、一向に女教師への恋心は見出すことが出来ない。

一方、彼が祝桂子と一緒に女教師の家へ行った時の様子は『闘いへの怖れ』（昭和二九年執筆）よりも二年前に『夜の匂い』（昭和二七年執筆）にも書かれていたが、気になる違いがこの二作品間にある。つまり『夜の匂い』では、彼がそうした行動をとったのは、結局のところ「理恵」とされている女教師を求めて来たからであったが、『闘いへの怖れ』は先述した通り、彼からの女教師への恋心は無い。あるのは女教師からの好意であり、それが招待という形で表わされたのである。ただし、共通するものも二作品間にはある。それは彼の、少女への愛である。女教師「理恵」を求める『夜の匂い』においても少女への愛の方に重きが置かれていると言えよう。

それにしても、この二作品間の愛の対象の違いをどう受け止めたら良いのか。そこで、その原因として、二作品の書かれた時期の島

尾の実生活を年譜（『島尾敏雄研究』饗庭孝男編・島尾敏雄書誌第三部）から探ることが考えられる。

昭和二十七年三月、神戸市外国語大学を辞職し、東京都江戸川区小岩町一八一九番地に転居。

昭和二十九年 夏の終りの頃から、妻・ミホの健康がすぐれなくなった。

さて『夜の匂い』は二十七年の二月、つまり神戸在住最後の月に書かれた。又『闘いへの怖れ』は二十九年の十一月、つまり妻の発病後に書かれたことがわかるであろう。

ところで、発病前に書かれた『夜の匂い』の中に、既に発病を予想しているようなところが見られる。

木慈は理恵の不吉な狂乱の姿を妄想した。ユタ神に憑かれた理恵が髪ふり乱して夜の浜辺を疾走しているように思えた。

何れ必らず自分は死ぬという前提があったから、後に残される女の悲しみは当然であり、その悲しみが昂じて発狂したとしても、特に不自然なことではないとも考えられよう。幸い彼は死なずに済み、それ故、普通ならばもう女の発狂は予想されなくて良い筈であろう。

ところが、彼には、その予想が消せない。それは、この恋愛が異常な状況を背景に持っただけでなく、二人の資質が、今述べた「普通ならば」という発想に結びつくものではなかったからである。又そうした二人故、その関係も当然そこには作用していよう。それらについては後で触れるとして、発狂の予想は特に神戸で父の庇護の下に暮らしていた時にふくれあがったのであろう。何故ならば、後に『離脱』に書かれたような、彼の父の「妻へ対する仕打ち」等に

ヒステリックになって行く妻を、彼は見ていたからである。その結果として『夜の匂い』には、再び発病の予想を描き、実生活の上では親元を離れたのである。

しかし、現実には妻は発病し、予想は予想ではなくなった。そうした現実を前にして『闘いへの怖れ』という、妻は付け足し的にしか、つまり愛情の対象としてではなく登場する作品を書くのは、むしろ妻の反感をかうようなことではないのか。恐らく、そんなことは知っての上で書くところが、島尾らしいとも言えるのであろうが、わかりずらいところでもある。妻の発病という現実から逃避し、少女愛という憧憬へ向かった訳でもあるまいし、妻の発病を考えに入れたあ書いたに違いない。そして恐らくは『夜の匂い』よりも『闘いへの怖れ』の彼の愛の在り方が真実と思われる。

つまり、彼にとってミホは、出会いの時から、愛情の対象としての絶対者ではなかった。が、ミホにとっては彼こそが絶対者であった。そして多分ミホは、彼に対しても自分（ミホ）が絶対者として彼の前に在ると思いつけて来たのである。要するに、互いの絶対的な愛が二人の間に存在すると思っているミホと、ミホがそう思っていることを気付いていながらも、自分としてはそれ（絶対関係）を肯定出来ない彼との、関係意識のズレがあり、それが妻の発病という現実を引き起こしたのである。

すると彼としては、妻の関係意識を改めようと考え、もしそれに成功したならば、妻の発病も押えられると思ひ、ありのままに、というのとは少々疑わしいが、少女を重んじて書くことで、妻への絶対愛が無いことを言おうとして『闘いへの怖れ』を書いたのではないか。

私がこう思うのは、次のような島尾の言葉があるからでもある。

「ミホとの結びつきは、島にいたただ一人の娘が好きになったという事実にすぎない。ありふれた、よくある話だったと思っています。」（針生一郎との対談『新日本文学』54・2）

この言葉を頭から信じることは出来ないかも知れないが、二人の出会いそのものだけを考えるならば、意外とそういった偶然に過ぎなかったと言えそうな気がするのである。

しかし、偶然的なその出会いが、やがて彼にとっては必然的な恋愛へと変わって行く。一体何が、偶然を必然に変えたのか。彼の置かれた異常な状況や両者の関係が。或いは又、当事者の彼らにしか分からない何かがあったか。

「トエ」

ぼつんと中尉さんが呼びますと、

「え」

それまで眼を落していたトエは中尉さんの眼を見ました。そして彼女の運命をよみとったのです。

「私は誰ですか」

「ショハーテの中尉さんです」

「あなたは誰なの」

「トエなのです」

……ただ瞳がいくらかかなめを見ていたよりな気でありました。その瞳を見たときに中尉さんは自分が囚われの身になってしまったことを知りました。（『島の果て』）

島尾の最初の作品『島の果て』では、彼とトエミホとの出会い

は、先の『闘いへの怖れ』と違って、誰からともなく耳にしたトエのことが気になり出し、或る晩トエを訪ねて二人は初めて出会う。その時の様子が、今の引用である。ところで、年譜からは『闘いへの怖れ』の出会い方が事実のようであるが、この『島の果て』の方が、恋の発端としてはうまく描かれていよう。

顔を見たことも無いトエの所へ、何かにひかれるように訪ねて行く。その行動は、彼と仲良しの少女ヨチの「ね、中尉さん。トエが、トエがお魚をたくさんたくさん買いましたから、ショハーテの中尉さんに、いっしょに食べにおいでって」という言葉があったからだと言えなくもないが、理由としては弱い。ただ彼は、何かにひかれていたに違いない。そして、トエを初めて見る。その彼の眼を見たトエは、自分の運命Ⅱ彼への恋を読み取る。お互いのアイデンティティを確かめるかのような会話をし、彼も又、トエの瞳の中に自分の運命Ⅱ彼女への恋を読み取る。

何ともロマンチックで『島の果て』にふさわしいと思われる所だが、ここに二人の関係という落とし穴が仕組まれている。それは、トエの「ショハーテの中尉さんです」という言葉と、先に引用した少女ヨチの言葉にある。つまり、トエやヨチには、彼は「ショハーテの中尉さん」としてしか知られていない。それなのに（実は、それだから）彼に対する態度は、見知らぬ人へ対するそれではない。恐らく彼は、そのことに未だ気付いてはいないだろうし、自分が「ショハーテの中尉」であることから離れて、ただの一人の男として、トエに好意を抱いたのであろう。或いは、自分が旅人であることを自覚しており、旅先で拾う恋のようなものをここでも感じていたのか

も知れない。何れにしろ、彼の恋の発端には、自分が「ショハーテの中尉さん」であり、この島の守護神であるといった自覚は無く、ごく人間的な普通の恋の発端にあるようなものしか無かった筈である。勿論、見たこともない女の所へ訪ねて行くという行動そのものには、自分が「ショハーテの中尉さん」だから許されているといううな思い上がりは感じられるが、それもトエと会った時には消え去っていたのではないか。それ故、彼とてこの恋に落ち入って行くのである。

つまり彼は「ショハーテの中尉さん」であるといった外的条件には関係無しに、己れの内的要求のみによってトエに恋をし始めたのである。ところが、トエにとって彼は、出会う前から「ショハーテの中尉さん」として存在し、出会いの時も、そしてその後も「ショハーテの中尉さん」として存在する。だから二人が初めて会った時の、我々から見ると厚かましいとも思われる、彼の行動も許すことが出来たのである。

しかしそう考えると、彼が「ショハーテの中尉さん」であれば、彼をそう見る島の女なら誰でもが彼の恋の相手とも成りそうである。だが、現実にはトエだけがそう成った。それはトエⅡミホが、先に引用した島尾の言葉に言われるように「島にいたただ一人の娘」だったからかも知れないが、それでは余りに安易ではないか。仮に、年頃の娘が多くいたとしても、やはりトエⅡミホが選ばれたであろうと私は思う。そう思う理由をこれから説明してみたい。

部落の人たちは大人でも子供でもトエは自分たちと人間が違うのだと考えている人が多かったのです。それは昔からトエの家の

人たちはそういうふうには、思われてきたので、ほかには別に理由はなかったのですが、不思議なこととも思われずにトエは部落全体のおかげで毎日遊んでいてくらしに行くことができましたが、二、三の年寄たちは、トエがこの部落の生れの者でないことを知って居りました。（『島の果て』）

彼が、ここカゲロウ島にとつては旅人であつたように、トエ・ミホも又、旅人であつた。その旅の度合は遠近こそ違えども、カゲロウ島の生まれではない点において、二人は共通している。そして彼等は、幼少時の田舎への旅や学生時代の旅の経験から、旅人がどんなに旅先の地へ愛着を感じ、そこに入り込もうとしても、結局は入り込めずに拒否されてしまうことを知っていた。決定的に違う何かが、旅人とその間にはあると確信している。

そして同じ旅人であるトエ・ミホにしてもそこ（カゲロウ島）に入り込んでいように見えるが、やはり「自分たちと人間が違う」と思われており、そう思われていることに気付いてもらいたであらう。

つまり、カゲロウ島における二人は、「旅人」であるという点において同じ立場であつたし、それ故に二人は互いに「決定的に違う何か」を相手に感じる必要無く、恋へと走れたのである。だから、彼が「決定的に違う何か」を感じなくてはならない島の女と彼の恋は考えられないと、私は思うのである。

しかしながら、たとえ恋の発端がそうした内的要因に起因したとしても、現実の外的事象にぶつかって恋の内容が変わって行くことは避けられまい。そして彼ら二人の場合は、彼の予定された死という運命と、彼が隊長であるという二つの外的事象に先ずぶつからざ

るを得ない。しかし、そのことがより一層彼らの恋を深いものにしたのである。

朔中尉の世にも不思議な仕事を知ったときにトエは気が違いそうになりました。……トエは中尉さんがひるあんどんだと、うとんじられていたらしいことも知りました。可哀そうな中尉さん、トエにばかり威張ってみせて我儘をするのだわ、トエには中尉さんのぴりぴりした神経がその胸から伝わってくるのを知っていました。（『島の果て』）

ここで「世にも不思議な仕事」とされている特攻は、どう考えてみても人間のすべき仕事ではない。その非人間的仕事に、さらに信じられないことに自分の恋している彼が従事させられているとは。トエが発狂しそうになるのも当然であらう。そして、この恋もやがて一方的に消滅せざるを得ない。それまでの限られた時間を「みじかくも美しく燃え」たいのは、恋する者同士当然のことであらう。さらに私が思うのは、人間世界では考えられないような仕事に従事させられているという、人間性を無視された彼への人間的な、人間としての愛がトエに生まれているのではないかということである。

又、トエは彼が自分の思っていたような隊長らしくない隊長であることも知る。そして、先の予定された死とこの軍隊内での座りの悪さという、逃げ場の無い問題に苦しむ彼の、唯一の逃げ場が自分であると了承する。ところで、そう自覚すると、いくらかは技巧的に彼へ対して、救いを与えでもするかのように絶対愛を捧げてみせることも考えられるが、トエにはそうした装いは感じられない。ただ真実の絶対愛を捧げているだけ見える。

それは何故か。恐らくトエの資質による所が大きかろう。彼女は彼が「ただの隊長ではない」と気付いても、やはり彼は隊長として存在するという、この矛盾を疑わない資質の持主なのである。そしてその資質こそが、人間愛を発生させる基盤なのでもある。

それに対し彼は、自分が隊長にふさわしくないのに、尚、隊長であるという矛盾を疑わずにはいられない。そして、その矛盾を疑わない人へ対しての異和感を抱かざるを得ない。勿論それをトエに対しても抱いたであろうが、彼はそれを表に現わさない。仮に、現わしたとしても、生きているうちは、それが認められないと考えているからであるし、間もなく訪れる死が全てを解決してくれると信じているからでもある。彼はただ、表面上出来るだけ隊長らしく振舞っている。それは彼の苦しみの逆の表現でもあるが、恐らくトエはそのことにも気付いているからこそ、彼への愛は深められてゆくのである。しかし、彼はトエのそうした心理までは察していない。両者の間には、微妙なくらい違いがあったが、それがトエの資質から発生する人間愛によって、解消の方向へと向かったので、二人の恋は深いものとなっていくのである。

深まった恋に、新たな外的事象が訪れ、変質を強いて来た。終戦が、二人の間にもやって来たのである。今や彼の隊長という位置は有名無実と化し、彼の前にあった死は生へと置き換えられたのである。

トエのことをちらと思ったが、夜毎に血が狂ったように求めていた気持がうそのようにおさまっているのに気付いた。むしろ或る安らぎの中に吸収されているのではないかと思った。（『出発は遂に訪れず』）

それまでの、彼を束縛していた死や軍隊組織から解放され、今や彼は自由の人となった。しかし、死だけが自分の苦しみを解決してくれると信じていた彼には、再び生の現実の問題にぶつからなくては生きていけないことで、完全に自由の人になったとは言えない。この感受については前章で触れた通りであるが、その現実も戦争によって変化したと期待し、生へはやはり自由を感じる。

それは、もうこの島でのことは忘れて、新しい気持で、新しい場所、新しく生き、そして新しい恋をすることも出来ると思わせたのであろう。最早、彼は死ぬためにやって来た特別の旅人でもなければ、隊長でもない。ただの旅人に過ぎなくなったのである。そしてそれは、トエとの深い恋とて、旅人の旅先での偶然的な恋と片付けて、その地を去ってしまうことさえ出来る人となったことを表わしている。先の引用中の「或る安らぎ」とは、ただの旅人に復帰した彼の、かつて慣れし旅人的心情のことを言う。

しかし彼は、そうした旅人的行動は選ばず、トエとの恋愛を貫こうとする。それは彼が旅人を放棄したことでもあり、二人の恋が最早外的事象の変化で崩れてしまうようなものではないことの証明でもある。その恋愛の深ささえあれば、どんな外的事象が訪れようと、この自分たちには関係ないとさえ、彼には言い切れたであろう。恐らくトエもホにも。

敗戦という外的事象では二人の愛は変質を強いらなかった。しかし、敗戦の後にぶつからざるを得なくなった現実Ⅱ戦後という外的事象によって、変質を強いられることとなったのであった。

（一九八二年卒）